

聖霊降臨節第 13 主日礼拝説教要旨(8 月 16 日)

『義とされた者』 早川 真牧師

ルカによる福音書 18:9-14

ここで言われている義とは、神の前における正しさのことです。その点においてファリサイ派の人は二つの思い違いをしていました。一つは人と比べて自分の正しさを測っていたことです。そしてもう一つの思い違いは自分の行いが神の前に正しいと思っていたことです。

私たちはしばしば、神により頼むよりも目に見える自分の行いにより頼んでしまうことがあります。その事を思う時、このファリサイ派の人の姿は、自分自身の姿であると思わずにはいられません。

罪とは的外れのことです。神に依り頼んでいるつもりがいつの間にか自分自身に依り頼んでいる事に気づかされる時、私たちもまた、徴税人のように、胸を叩きながら、神様、罪人の私を憐れんでくださいと言わざるを得ないのではないのでしょうか。

しかしそのような私たちのために、イエス・キリストは十字架にかかりその尊い血を流して下さったのです。十字架を見上げる時、私たちはへりくだらざるを得ません。十字架は私たちの罪のゆえの罰を自ら独り子に負わせられた神の一方的な憐れみのしるしであるからです。私たちが感謝すべきはその神の憐れみであり、全ての人はその神の憐れみに感謝するように招かれています。そして私たちが十字架を見上げへりくだる時、本当の平和が実現していくのであります。

自分を他人よりも正しい者と思い、勘違いをしている、それが人の罪の現実です。神はそんな私たちを深く憐れみ、十字架の上でイエス・キリストの血を流すことによって平和への道を備えてくださいました。私たちはいつもこの十字架を見上げて、ただ神の憐れみによって義とされた者として、その救いの喜びを証ししていきたいと思えます。